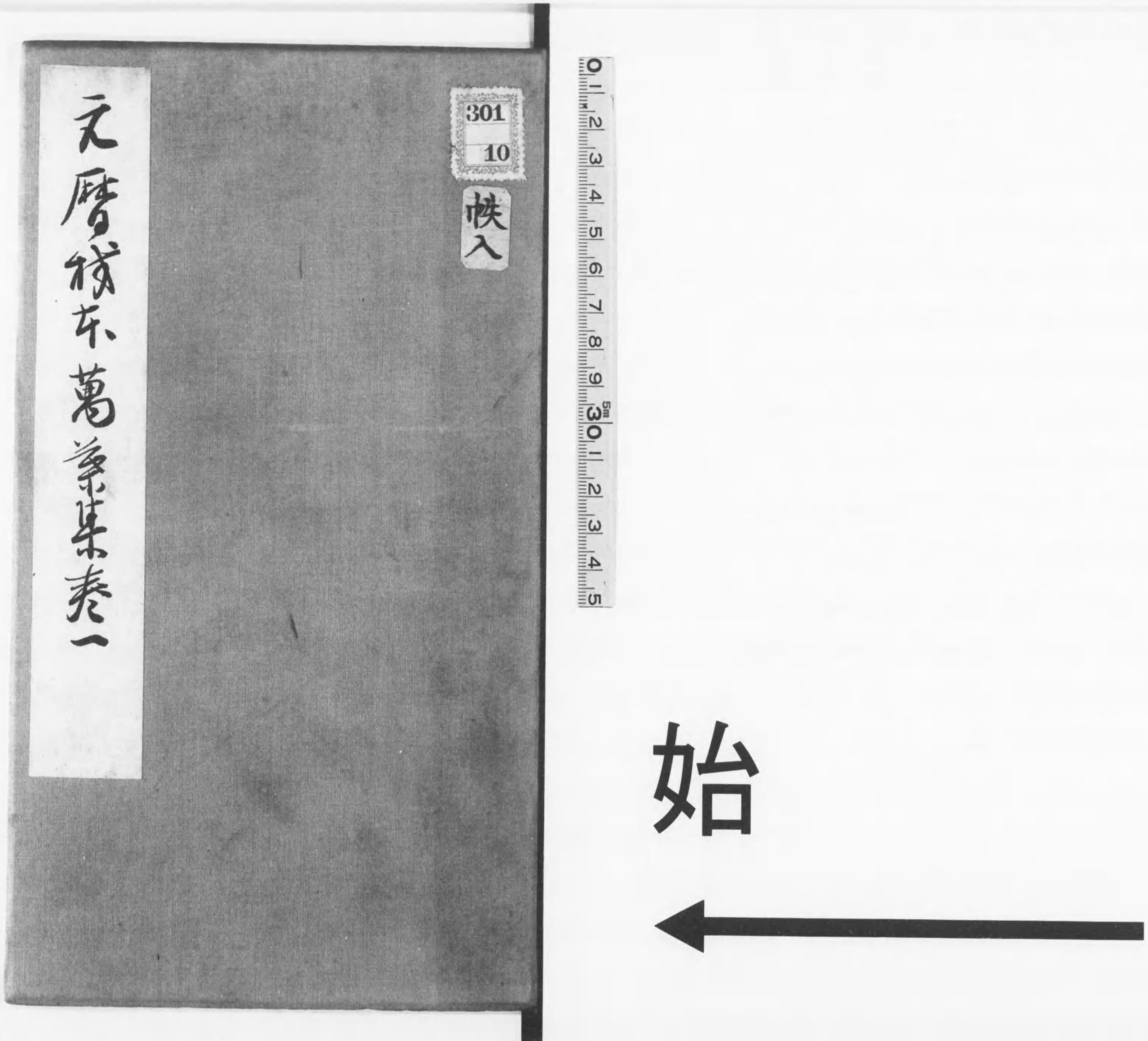

元曆校本萬葉集卷一

傳藤原公任筆

元暦校本萬葉集

釋文

傳藤原公任筆　元暦校本萬葉集第一　解題並釋文

解　題

この元暦校本萬葉集は卷の終りに元暦元年六月九日以或人校合弓右近權少將とあるのでかく名づけられたのである。もと伊勢射和の富山氏の有であつたのを後に攝津神戸の俵屋の手に移り享保十三年靈元法皇の叡覽に備へたことがあるといふ。荒木田久孝、橘經亮は之れを見、經亮はそれを橘窓自語、及び梅窓筆記に書いてゐる、又木村博士の萬葉集書目提要には經亮の文を引き後に俵屋から桑名家を經て更に水野家に傳はつたといふことも書いてある。

而して現存するものは二十卷の內十六卷ありやなしやで冊數凡そ十六冊餘其內鎌倉時代に、補寫せしものもあり今は高松宮家と古河家に大部分傳はつて他は數葉諸家に散在してゐる。

この萬葉集は鳥ノ子に飛雲が兩面にあるを特色とする料紙にて作られ粘葉本である。これが筆者に就いては藤原公任の筆なりと傳へられるが勿論別に確固たる證左があつての事ではなく恐らくはこの萬葉集の十九卷が本願寺三十六集の家持集と同手のものであるといふ推定からして、はた又奥書に元暦元年とあるからには元暦以前又は同時代の人々數名の寄合書と見るのが正しいのであらう現在みる所では十四人位の筆者で書寫されて居るのではないかと思はれる。

尙元暦萬葉集の中から散佚したるのに宗尊親王の有栖川切、世尊寺伊經の難波切がある。一は宮家に傳はり一は神戸に在つたが爲めにかくいふのである。そして他の萬葉集に比してかく大部に傳存せらるゝことは實に歌學上裨益する所尠なくないのみならず又書學上實に貴重なる資料である。

本集に掲載する第一卷全部は筆力溫雅流麗にて世人に最も愛好せら

るゝ部分でこれと同系統と推定せらるゝものに高野切第三種、御物粘葉本、和漢朗詠集、法輪寺切、近衛家朗詠集、伊豫切五首一紙等がある。

（第一卷の目次は都合上省略す不悪御諒恕を乞ふ）

釋　文

萬葉集卷第一

泊瀬朝倉宮御宇天皇代　太泊瀬稚武天皇

天皇の御製の歌

籠もよ　み籠持ち　掘串もよ　み掘串持ち　この岳に　菜摘ます兒　家聞かな　名告らさね　そらみつ　やまとの國は　おしなべて　吾こそ居れ　敷きなべて　吾こそ坐せ　我こそは告らじ　家をも名をも

高市岡本宮御宇天皇代　息長足日廣額天皇

天皇、香具山に登りて望國しませる時、御製の歌

大和には　群山あれど　とりよろふ　天の香具山　登り立ち　國見をすれば　國原は　煙立ち立つ　海原は　鷗立ち立つ　うまし國ぞ　あきつ島　大和の國は

天皇、內野に遊獵し給へる時、中皇命、間人連老をして獻らせたまふ歌

やすみしし　わが大王の　朝には　とり撫でたまひ　夕には　い倚り立たしし　御執らしの　梓弓の　長弭の　音すなり

反歌

たま支者るうち能於ほの爾こまなめてあ
さふ万須らん曾の久さふ可能

讃岐國安益郡に幸せる時、軍王、山を見て作れる歌

霞立つ　長き春日の　暮れにける　わづきも知らず　むらぎもの　心を痛み　要子鳥　うら歎居れば　玉襷　懸けのよろしく　遠つ神　わが大王の　行幸の山越す風の　獨居る　吾が衣手に　朝夕に　還らひぬれば　丈夫と　思へる吾も　草枕旅にしあれば　思ひ遣る　たづきを知らに　網の浦の　海處女らが　燒く鹽の　念ひぞ燒くる　吾が下ごころ

反歌

や末こし能可せをと支志みぬるよ於ち寸いへ

爾あるいもを可个てし能ひつ

右日本書紀を撿するに、讃岐國に幸しし事なし。また、軍王いまだ詳ならず。但山上憶良大夫の類聚歌林に曰く、記に曰く、天皇十一年己亥冬十二月己巳朔壬午、伊豫の温湯の宮に幸せり云々。一書にいふ、この時に宮の前に二の樹木あり、この二樹に斑鳩比米二つの鳥大く集まれり。時に勅して多く稲穂をかけてこれを養ふ。すなはち作れる歌云々。もし疑ふらくはこの便より幸ししか。

明日香川原宮御宇天皇代 天豐財重日足姫天皇

額田王の歌 未だ詳ならず

あ支のゝ能をはな可利ふ支やとれ利しうち能みやこの可利ほし曾於もふ

右山上憶良大夫の類聚歌林を撿するに曰く。一書、戊申の年、比良宮に幸しし大御歌。但、紀に曰く、五年春正月己卯朔辛巳、天皇紀の温湯に至り

たまふ。三月戊寅朔、天皇吉野宮に幸して肆宴きこしめす。庚辰の日。天皇、近江の平の浦に幸す。

後岡本宮御宇天皇代 天豐財重日足姫天皇位の後、後の岡本宮に卽き給ふ

額田王の歌

な利多つ爾ふ那の利世むとつ支まてはし

ほも可那ひぬいま盤こ支こ那

右山上憶良大夫の類聚歌林を檢するに曰く、飛鳥岡本宮御宇天皇元年己丑、九年丁酉十二月己巳朔壬午、天皇、大后、伊豫の湯の宮に幸す。後岡本宮馭宇天皇七年辛酉春正月丁酉朔壬寅、御船西に征き、始めて海路に就く。庚戌御船伊豫熟田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶存れる物を御覽して、當時忽に感愛の情を起したまふ。このゆゑにより歌詠を製して哀傷したまへり。すなはちこの歌は天皇の御製なり。但額田王の歌は別に四首あり。

紀の溫泉に幸せる時、額田王の作れる歌

莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣吾背之がい立たしけむ嚴櫃が本

中皇命、紀伊の溫泉に往ませる時の御歌

支み可よもわ可よ毛しら須い者しろ能
を可能久さねをいさむ春ひて那
わ可せこは可利ほつ久ら寸久佐なく者こま
つ能もとの久さを可れかし
わ可於もひしの志まはみせ徒所こふ可
きあこねのうら能たま所ひろ八ぬ

右山上憶良大夫の類聚歌林を撿するに曰く、天皇の御製の歌云々。中大兄

近江宮御字天皇　三山の歌一首

香具山は　畝火を愛しと　耳梨と　相爭ひき　神代より　斯くなるらし　古昔も
然なれこそ　現身も　嬬を　爭ふらしき

た可やまとみゝなしやまとあひしと支多
ちみつ支にしい那ひ久爾者ら
王多つみ能とよ者多久もにい利ひさし
こよひのつ支よすみあ可久こ所

右一首の歌は、今案するに反歌に似ず。但舊本この歌を以て反歌に載す。故、今猶この次に載す。また紀に曰く、天豐財重日足姫天皇の先の四年乙巳に、天皇を立てて皇太子となす。

近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇

天皇、内大臣藤原朝臣に詔して、春山の萬花の艶、秋山の千葉の彩を競はしめ給ふ時、額田王、歌を以ちてこたへまうす歌

冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來鳴きぬ　開かざりし　花も開けれど
山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木葉を見ては　黄葉
をば　取りてぞ賞ぶ　青きをば　置きてぞ歎く　そこし恨めし　秋山吾は

額田王近江國に下りし時、作れる歌、井戸王すなはち和ふる歌

味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山の際に　い隠るまで　道の隈　い積るまでに　つばらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見放けむ山を　情なく　雲の　隠さふべしや

反歌

みわやまをし可もか久須可久もた爾も

こゝろあらなん可久さふへしや

右二首の歌は、山上憶良大夫の類聚歌林に曰く、都を近江國に遷しし時三輪山を御覽せる御歌なり。日本書紀に曰く、六年丙寅春三月辛酉朔己卯、都を近江に遷す。

綜麻形の林の始のさ野榛の衣に著くなす眼に著くわが背

右一首の歌は、今案するに、和ふる歌に似ず。但舊本この次に載す。故に以て猶載す。

天皇、蒲生野に遊獵し給へる時、額田王の作れる歌

あ可ねさすむらさき支のゆ支しめ能ゆ支

能も利者み春や支み可そてふる

皇太子の答へませる御歌　明日香宮御宇天皇

むらさきのゝほへるいも可に久ゝあらは

ひと徒万ゆゑ爾わ可ひひめやも

紀に曰く、天皇七年丁卯夏五月五日、蒲生野に縦獵したまふ。時に大皇弟、諸王、内臣、及び群臣、悉く皆從へり。

明日香清御原宮天皇代　天渟中原瀛眞人天皇

十市皇女、伊勢神宮に參赴きし時、波多の横山の巖を見て吹芡刀自の作れる歌

河の上の五百箇磐群に草生さず常にもがもな常處女にて

吹芡刀自は、未だ詳ならず。但紀に曰く、天皇四年乙亥の春二月乙亥朔

丁亥、十市皇女、阿閉皇女、伊勢神宮に參赴きたまふ。

麻續王の伊勢國伊良虞の島に流されし時、時の人の哀傷して作れる歌

打麻を麻續王白水郎なれや伊良虞が島の珠藻刈りをす

麻續王、之を聞き感傷して和ふる歌

う徒せみのい能ちをゝし美那み爾ひち

いらこのしまに多まもか利し久

右日本紀を案ずるに曰く、天皇の四年乙亥夏四月戊戌乙卯、三位麻續王罪ありて因幡に流され、一子伊豆島に流され、一子血鹿島に流されき。ここに伊勢國伊良虞島に配さるといへるは、もし疑ふらくは、後の人、歌の辭に因りて誤り記せるか。

天皇の御製の歌

み吉野の　耳我の嶺に　時なくぞ　雪は降りける　間なくぞ　雨は零りける　その雪の　時なきが如　その雨の　間なきが如　隈もおちず　思ひつつぞ來る　その山

道を

或本の歌

み芳野の　耳我の山に　時じくぞ　雪は降るとふ　間なくぞ　雨が降るとふ　その雪の　時じきが如　その雨の　間なきが如　隈もおちず　思ひつつぞ來る　その山道を

右句句相換れり。これに因りて重ねて載す。

天皇吉野宮に幸せる時、御製の歌

淑人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見つ

紀に曰く、八年己卯五月庚辰朔甲申、吉野宮に幸す。

藤原宮御宇天皇代　高天原廣野姫天皇

天皇の御製の歌

者る春支てな徒所支ぬらしゝろ多へ能こ

ろも可は可るあま能可こやま

近江の荒都を過ぎる時、柿本朝臣人麿の作れる歌

玉襷　畝火の山の　橿原の　日知の御代ゆ（或は云ふ宮よ）　生れましし　神のことごと　樛の木の　いやつぎつぎに　天の下　知ろしめしを（或は云ふめしけり）　天にみつ　倭を置きて　あをによし　奈良山を越え（或は云ふ、そらみつ大和を置きあをによし平山越えて）　いかさまに　おもほしめせか　天離る　夷にはあれど　石走る　淡海の國の　さざなみの　大津の宮に　天の下　知ろしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　此處と聞けども　大殿は　此處と言へども　春草の　茂く生ひたる　霞立つ　春日の霧れる（或はいふ、霞立つ春日か霧れる、夏草か繁くなりぬる）　百磯城の　大宮處　見れば悲しも（或は云ふ、見ればさぶしも）

反歌

さざなみの　志賀の　辛碕　幸くあれど　大宮人の　船待ちかねつ

（以下脱洩に付参考までに載す）

さざなみの志賀の（一に云ふ比良の）　大曲淀むとも昔の人に亦も逢はめやも（一に云ふ、あはむともへや）

高市古人、近江の舊堵を感傷して作れる歌　或書にいふ高市連黒人

古りにし人にわれあれやささなみの故き京を見れば悲しき

ささなみの國つ御神のうらさびて荒れたる京見れば悲しも

紀伊國に幸せる時、川島皇子の御作歌　或はいふ、山上臣憶良の作

白浪の濱松が枝の手向草幾代までにか年の經ぬらむ（一に云ふ年は經にけむ）

日本紀に曰く、朱鳥四年庚寅秋九月、天皇紀伊國に幸したまふ。勢の山を越ゆる時、阿閉皇女の御作歌

これやこの大和にしては我が戀ふる紀路にありとふ名に負ふ勢の山

吉野宮に幸せる時、柿本朝臣人麿の作れる歌

やすみしし　吾大王の　聞し食す　天の下に　國はしも　多にあれども　山川の清き河内と　御心を　吉野の國の　花散らふ　秋津の野邊に　宮柱　太敷きませば百磯城の　大宮人は　船並めて　朝川渡り　舟競ひ　夕川わたる　この川の　絶ゆることなく　この山の　いや高知らす　水激る　瀧の宮處は　見れど飽かぬかも

反歌

美れとあ可ぬよしのゝ可はのとこ那め能多ゆ
ることなくま堂可へりみむ
やすみしし　吾大王　神ながら　神さびせすと　芳野川　たぎつ河内に　高殿を
高しりまして　登り立ち　國見をすれば　畳はる　青垣山　山祇の　奉る御調と
春べは　花かざし持ち　秋立てば　黄葉かざせり（一に云ふ、黄葉かざし）　逝き副ふ　川の神も
大御食に　仕へ奉ると　上つ瀬に　鵜川を立て　下つ瀬に　小網さし渡す　山川も
依りて奉れる　神の御代かも

反歌

やま可はもよ利てつ可ふる可み那からた支つ
可者うちにふ那てせむ可も

右日本紀に曰く、三年己丑正月、天皇吉（以下脱す）野宮に幸す。八月吉野宮に幸す。四年庚寅二月、吉野宮に幸す。五月吉野宮に幸す。五年辛卯正月、吉野宮に幸す。四月、吉野宮に幸す。と

いへれば、未だ詳に知らず、何れの月駕に從ひて作れる歌なるかを。

伊勢國に幸せる時、京に留まれる柿本朝臣人麿の作れる歌

英虞の浦に船乗りすらむおとめ等が珠裳の裾に潮滿つらむか
釵著く手節の埼に今日もかも大宮人の玉藻苅るらむ
潮騒に伊良虞の島邊榜ぐ船に妹乗るらむか荒き島回を

當麻眞人麿の妻の作れる歌

吾背子はいづく行くらむ奥つ藻の名張の山を今日か越ゆらむ

石上大臣、駕に從ひて作れる歌

吾妹子をいざみの山を高みかも大和の見えぬ國遠みかも

右日本紀に曰く、朱鳥六年壬辰春三月（以上脱す）丙寅朔戊辰、淨廣肆廣瀬王等を以て留守の官となす。ここに中納言三輪朝臣高市麿、その冠位を脱して朝に擎上げ、重諫して曰く、農作の前、車駕いまだ以て動かすべからずと。辛未、天皇諫に從はずして遂に伊勢に

幸したまふ。五月乙丑朔庚午、阿胡の行宮に御す。

輕皇子の安騎野に宿りませる時、柿本朝臣人麿の作れる歌

やすみしし　吾大王　高照す　日の皇子　神ながら　神さびせすと　太敷かす　京を置きて　隱口の　伯瀨の山は　眞木立つ　荒山道を　石が根の　樁枝おしなべ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さりくれば　み雪降る　阿騎の大野に　旗薄しのをおし靡べ　草枕　旅宿りせす　古思ひて

短歌

阿騎の野に宿る旅人うち靡き寐らめやも古おもふに

まくさ可るあら能者あれどえ春支さる

きみ可ゝたみのあとよ利所こし

東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月西渡きぬ

日並の皇子の尊の馬竝めて御獵立たしし時は來向ふ

藤原宮の役民の作れる歌

やすみしし　吾大王　高照す　日の皇子　あらたへの　藤原が上に　食國を　見し給はむと　都宮は　高知らさむと　神ながら　思ほすなべに　天地も　依りてあれこそ　磐走る　淡海の國の　衣手の　田上山の　眞木さく　檜の嬬手を　もののふの　八十氏川に　玉藻なす　浮べ流せれ　其を取ると　さわぐ御民も　家忘れ　身もたな知らに　鴨じもの　水に浮きゐて　吾が作る　日の御門に　知らぬ國　依り巨勢道ゆ　我が國は　常世にならむ　圖負へる　神龜も新代と　いづみの河に　持ち越せる　眞木の嬬手を　百足らず　筏に作り　泝すらむ　勤はく見れば　神ながらならし

右日本紀に曰く、朱鳥七年癸巳秋八月、藤原宮地に幸したまふ。八年甲午春正月藤原宮に幸したまふ。冬十二月庚戌朔乙卯、藤原宮に遷り居たまふ。

明日香宮より藤原宮に遷居りましし後、志貴皇子の御作歌

采女の袖吹きかへす明日香風京を遠みいたづらに吹く

藤原宮の御井の歌

やすみしし　わご大王　高照す　日の皇子　あらたへの　藤井が原に　大御門　始め給ひて　埴安の　堤の上に　在り立たし　見し給へば　大和の　青香具山は　日の經の　大御門に　春山と　繁みさび立てり　畝火の　この瑞山は　日の緯の　大御門に　瑞山と　山さびいます　耳無の　青すが山は　背面の　大御門に　宜しなべ神さび立てり　名ぐはし　吉野の山は　影面の　大御門ゆ　雲居にぞ　遠くありける　高知るや　天の御蔭　天知るや　日の御影の　水こそは　常にあらめ　御井の清水

短歌

藤原の大宮づかへあれつぐや處女がともは羨しきろかも

右の歌、作者いまだ詳ならず

大寶元年辛丑秋九月、太上天皇紀伊國に幸せる時の歌

こせやまのつらつら徒者支つらつらにみつゝおもふ那こせ能者る能を

右の一首は坂門人足

麻裳よし紀人羨しも亦打山行き來と見らむ紀人羨しも

右の一首は調首淡海

或本の歌

河の上のつらつら椿つらつらに見れども飽かず巨勢の春野は

右の一首は春日藏首老

二年壬寅、太上天皇參河國に幸せる時の歌

引馬野ににほふ榛原入り亂り衣にほはせ旅のしるしに

右の一首は長忌寸奥麻呂

何所にか船泊すらむ安禰の埼こぎ回み行きし棚無し小舟

右の一首は高市連黑人

譽謝女王の作れる歌

ながらふるつま吹く風の寒き夜に吾が背の君はひとりか寢らむ

長皇子の御歌

暮に逢ひて朝面無み名張にか日ながき妹が廬せりけむ

舍人娘子、駕に從ひて作れる歌

丈夫が得物矢手挿み立ち向ひ射る的形は見るに清けし

三野連名岡く入唐の時、春日藏首老の作れる歌

在嶺よし對島の渡海なかに幣取り向けて早還り來ね

山上臣憶良、大唐に在りし時、本郷を憶ひて作れる歌

いさことも者やひの毛とへ於ほとも能みつ能者まゝつ万ちこひぬらむ

慶雲三年丙午、難波宮に幸せる時、志貴皇子の御作歌

あしへゆ久可も能者可ひ爾しもふ利てさむきゆふへのことをし所於もふ

長皇子の御歌

霰うつ安良禮松原住吉の弟日娘と見れど飽かぬかも

太上天皇、難波宮に幸せる時の歌

於ほとも能た可しの者ま能まつのねをまくら爾ぬれといへも於毛本ゆ

右の一首は置始東人

旅にして物戀しきの鳴くことも聞えざりせば戀ひて死なまし

右一首は高安大島

於本ともものみつ能者まにあ累わ春れ可ひいへ爾あるいもを王春れて於もつや

右の一首は身人部王

草枕旅行く君と知らませば岸の埴生ににほはさましを

右の一首は清江娘子、長皇子に進れり（姓氏詳ならず）

太上天皇、吉野宮に幸せる時、高市連黑人の作れる歌

やまとに者な支て可久らむよふこと利支佐能
な可やまよひ所こ春那る

大行天皇、難波宮に幸せる時の歌

やまとこひのねられぬ爾こゝろ那くこゝの春
き支に多徒なくへしや

右の一首は忍坂部乙麿

玉藻苅る奥方は榜がじ敷妙の枕の邊忘れかねつも

右の一首は式部卿藤原宇合

長皇子の御歌

吾妹子をはやみ濱風大和なる吾松椿吹かざるなゆめ

大行天皇、吉野宮に幸せる時の歌

よしのゝやま能し多可せさむ个く爾者たや
よひもわれひと利ねむ

右の一首、或は云ふ、天皇の御製の歌

うちまや万あさ可せさむしたひ爾して
ころも可佐なんいもゝあら那久爾

右の一首は長屋王

和銅元年戊申、天皇の御製の歌

ますらをのと能於とすな利ものゝふ能むほま
うち支み多てたつらし毛

御名部皇女の和へ奉まつれる御歌

わ可み可ども能な於本し所春へ可みの徒
きてたまへる王れなら那久爾

和銅三年庚戌春二月、藤原宮より寧樂宮に遷りませる時御輿を長屋原に停めて古郷を廻り望みて御作歌　一にいふ、太上天皇の御製

飛ぶ鳥の〇〇香の里を置て去なば君が邊は見えずかもあらむ　一に云ふ君があたりを見ずにかもあらむ

（原本はこの行以下散佚す参考までに以下收載す）

或本、藤原京より寧樂宮に遷りませる時の歌

天皇の　御命かしこみ　柔びにし　家を釋て　隱國の　泊瀬の川に　船浮けて　吾が行く河の　川隈の　八十隈おちず　萬度　かへりみしつつ　玉桙の　道行き暮らし　あをによし　奈良の京の　佐保川に　い行き至りて　我が寢たる　衣の上ゆ　朝月夜　清に見ゆれば　栲の穗に　夜の霜降り　磐床と　川の水凝り　冷ゆる夜を　息ふことなく　通ひつつ　作れる家に　千代までに　來ましませ君と　吾も通はむ

反歌

あをによし寧樂の家には萬代に吾も通はむ忘ると念ふな

右の歌、作主いまだ詳ならず

和銅五年壬子夏四月、長田王を伊勢齋宮に遣しし時、山邊の御井にて作れる歌

山の邊の御井を見がてり神風の伊勢處女ども相見つるかも

うらさぶる情さまねしひさかたの天の時雨の流らふ見れば

海の底奥つ白波立田山いつか越えなむ妹があたり見む

右二首は、今案するに、御井にして作る所に似ず。もし疑ふらくは、當時誦せりし古歌か。

寧樂宮

長皇子、志貴皇子と佐紀宮にて倶に宴せる歌

秋さらば今も見る如妻ごひに鹿鳴かむ山ぞ高野原の上

右の一首は長皇子

萬葉集卷第一終

昭和十二年七月十五日發行御
定價金貳圓參拾錢

發行所　本校層元
集業處

編輯兼發行者　東京市下谷區中御徒町七二　武田雪谷
印刷兼發行人　東京市下谷區中御徒町七二　武田雪谷
印刷所　東京市麻布區宮下町六丁目二〇　秀文堂
發行所　東京市下谷區中御徒町七二　武田雪谷
賣捌所　東京市下谷區中御徒町七二　武田雪谷
東京都麻布區宮下町六丁目二〇　秀文堂
東京都下谷區中御徒町七二　武田雪谷

萬葉集卷第一

裏書ニ

ココヒヨコモ チヌクシモヨモ フクシモモテ コノオカミナムヤ ルニカイヘキケ太ケサヨソウニミ
ヤマトノクニハ オシナベテ われコソオラメ ワレコソハ
セナニハ〻ケ ムイヘヲモナノモ

神代ヨリ

椿宮 橿原

日今宮 天磐盾向瀬 朝倉宮御宇天皇代 太泊瀬稚武天皇

那向岡 橿原宮 畝火山国号虚見津大和之国 天饒舟当亡見吉事記序

大和国城上郡磐坂 大泉 御製歌

籠毛與 義籠母乳布久思毛與 義夫君志持此岳

尓茉採須兒家吉閑名告紗根虚見津山跡乃
國者押奈户手吾許曽居師告名倍手吾已
曽座我許背齒告目家呼毛名雄毋

高市巳年宮御宇天皇代 息長足日廣額天皇

天皇登香具山望國之時御製歌

山常庭村山有等取與呂布天乃香具山騰
立國見乎為者國原波煙立龍海原波加萬目
立多都怜何國曽蜻嶋八間跡能國者

天皇遊獵内野之時中皇命使間人連老獻歌

八隅知之我大王乃朝庭取撥賜夕庭伊縁立
之御狩乃榛弓之尓加弭乃音為尓利朝猟
尓今立浪良思暮猟尓今他田渚良之御執能
榛弓之尓加弭乃音為尓里

反歌

東歌
宝物内限者

謂勝浦州人歟
一百廿年

玉魁春内乃大野尓馬數而朝布麻須等六其
草深野

たゝなはるうちもれむほのゝようなるあ
ふ百はらんうのゝをふなれ

幸讃岐國安益郡之時軍丑見山作歌

霞立長春日乃晩家流和豆肝之良受村肝乃
心乎痛見奴要子鳥卜歎居者珠手次縣乃宜
久遠神吾大王乃行幸能山越風乃獨座吾衣
手尓朝夕尓還比奴婆大夫登念有我母草枕客
尓之有者思遣鶴寸乎白去細能浦之海士女
小之焼塩乃念曽所焼吾下情

反歌

山越乃風乎時自見窠夜不落家在妹乎懸而

小竹横

やまらしれうせをぞ三みゆるまたちすいへ

るあるいもをうなてしれひつ

右検日本書紀無幸於讃岐國之軍事未詳

也但山上憶良大夫類聚歌林日記曰

天皇十一年己亥冬十二月己巳朝壬午幸于

伊与温湯宮云々

一書是時宮前在二樹木此之二樹斑鳩比来

二島大集時勅多桂稲穂而養之仍作歌云々

若疑從此便幸之歌

明日香川原宮御宇天皇代 天豊財重日足姫天皇

額田王歌 未詳

金野乃美草苅葺屋杵礼里之兒道乃宮子能

皇極天皇 重祚

皇極天皇巳丑年

大和國高市郡岡本宮同地

借吾百磯所念

あまのれをはなつわかうち
れみやうわほうそたもふ

右検山上憶良大夫類聚歌林曰一書代申年
幸比良宮大御歌但紀日五年春正月己卯
朔辛巳天皇至自紀温湯三月代寅朔
天皇幸吉野宮肆宴焉庚辰ム日天皇幸
近江之平浦

裏書云
藤原太子宮
同紀也
香川天皇 皇極天皇重祚也
天智天武同
人皇也

後岡本宮御宇天皇代 天豊財重日足姫天皇
位後即後岡本宮

額田王歌

熟田津尓船乗世武登月待者潮毛可奈比沼
今者許藝乞菜

なわさもとつよてはし
ほもうのひはいまそこぎいな

右檢山上憶良大夫類聚歌林曰飛鳥
岡本宮御宇天皇元年己丑九年丁
酉十二月己巳朔壬午天皇大后幸于
伊豫湯宮後岡本宮馭宇天皇七
年辛酉春正月丁酉朔丙寅御船西
征始就于海路庚戌御船泊于伊豫
熟田津石湯行宮天皇御覽昔日
猶存之物當時忽起感愛之情所
以因製歌詠為之哀傷也即此歌
者天皇御製焉但額田王歌者別
有四首

（裏ニ云フ 天武天皇大八七 十市王ハ母額田姫王ニ生シ 或説ニ文禁ニ

幸于紀温泉之時額田王作歌

草枕旅の宿りの大相七兄の湯氣吾瀬の射立
為蓋五可新何本

中皇命往于温泉之時御歌

君之齒母吾代毛所知都盤代乃思之草根乎

玄来結手名

まみのよもわのよもうらいたきてろれ

をのれらをはをいさむもひてれ

吾勢子波借廬作良須草無者小松下乃草

乎苅核

わのせこはうちほつらすすけなくさこそ

つれもとのくさをかりしか

吾欲之野嶋波見世退底深伎阿胡根能

浦乃珠曽不拾

わのおもひのしまはみせたてふかきあ

こねのうらのたまそひろはす

さしあこがれたまふかね

或云吾欲子嶋羽見遠

右桧山上憶良大夫類聚歌林曰

乘之中大兄皇子

皇極天皇 天豐財重日足姫尊六月譲位孝徳天皇 皇太子中大兄 天智天皇

天皇御製歌云々

高山波雲根火雄男志等耳梨與相諍

中大兄近江宮御宇天皇 三山歌

競伎神代從如此尓有良之古昔母然尓有許

曾虚蟬毛嬬乎相搏良思吉

及歌

高山與耳梨山与相之時立見尓来之伊奈美

國波良

たつのやまとみなのやまとあひしまより

ちみつるに　ひかれひさよもち
波津海乃豊孫雲余伊理比弥久今夜乃月
清明已曽
ひのつるよすみあつらん
右一首歌今案不似及歌也但舊本
此歌載於及歌故今猶載此次之

紀曰天豊財重日足姫天皇光四年乙
巳立天皇為皇太子
天皇詔内大臣藤原朝臣競春山萬花之
近江大津宮御宇天皇代　天命開別天皇
志賀郡大津宮也　謚曰天智天皇
額田王以歌判之歌
艶秋山千葉之彩時
冬木成春去来者不喧有之鳥毛来鳴奴不開

有〻花毛佐家礼杼山乎茂入而毛不取草
深執手母不見秋山乃木葉乎見而者黄葉乎
婆取而曽思努布青乎者量而曽歎久曽許
〻恨〻秋乃吾者

八

頌豊下近江國時作歌并序即和歌

味酒三輪乃山青丹吉奈良能山乃山際伊隠
萬代道隈伊積流萬代乎委曲毛見管行武
雄叫〻毛見牧武〻萬雄情無雲乃隠障倍〻也

反歌

三輪山乎然毛隠賀雲谷裳情有南畝可苦

佐布倍思哉

みわやまをーつもかくはのこもやまも
ふるあらなんうらさびしつゝや

右二首歌山上憶良大夫類聚歌林
日遷都近江國時御覽三輪山御
歌焉日本書紀曰六年丙寅春三
月辛酉朔己卯遷都于近江

綜麻形乃林始乃狭野榛能衣小著成自小都
久和我埼

右一首歌今案不似和歌但舊本載
于此次故以猶焉載

天皇遊獵蒲生野時額田王作歌

茜草指武良前野遊標野行野守者不見

我君乞袖布流

あかねさすむらさきのゆきしめしゆえ

にくからぬひとのつまをあるらんや

書こ皇太子答ふ天武天皇

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻故に我恋めやも

大十市在同位振袖ふ

紫草能小保敝類妹乎小若久有者人嬬故

尓吾恋目八方

むらさきのゝほこるいもをにくあらば

ひとにつまゆゑにわがこめやも

明日香宮御宇天皇

謚曰天武天皇

紀曰天皇七年丁卯夏五月五日縱獵

於蒲生野于時大皇弟諸王内臣及

群臣悉皆従焉

明日香清原宮天武天皇代 天淳原瀛真人天皇謚曰天武天皇

十市皇女参赴於伊勢神宮時見波多

横山巖吹英刀自作歌

河上乃湯都盤村二草弐左受常丹毛兼名

常

處女貢手

吹英刀自

第四妃有永世歌二首

真野之浦乃淘鹽乃継橋横田之味之浦回矢之五百

吹英刀自未詳也但紀日天皇四年乙

亥春二月乙亥朔丁亥十市皇女阿閇

皇女參赴於伊勢神宮

麻續王流於伊勢國伊良虞嶋之時人

哀傷作歌

河上乃伊都藻之花乃何時毛

時不須我將見子

吹英刀自

十市皇女天武天皇

第五女母額田姬王

大和國高市郡今橿原市付近

号大海皇子後為天武天皇

打麻乎麻績王白水郎有哉射水鵜苅海人

乃珠藻刈麻須

麻續王聞之感傷和歌

空蟬之命乎惜歎浪小所湯伊良虞能嶋之玉藻苅食

うつせみのいのちをしまはなみたちいらこのしまにたまもかりけり

右案日本紀曰天皇四年乙亥夏四月丙午朔丁卯三位麻續王有罪流于因幡一子流伊豆嶋一子流血麻嶋也是云配于伊勢國伊良虞嶋者若是後人緣歌辭而誤記乎

天皇御製歌

三吉野之耳我嶺乎時無間雪者降家留間無間雨者零計類其雪乃時之如甚降乃間無

如隈毛不落念ヲ叙来其山道乎

或本歌

三芳野之耳我山ハ今時自久曽雪者落ケリ言ヒシ間曽雨者落ケリ其雪不時如其雨ニ云間如隈毛不墮思ヲ叙来其山道乎

右句々相樓目此重載焉

天皇幸于吉野宮時御製歌

渉人乃良跡吉見而好常言所芳野吉見多良人四来三

紀只年己卯五月庚辰朔甲申幸于吉野宮

藤原宮御宇天皇代 高天原廣野姫天皇元年丁亥十一年讓位輕太子尊号曰太上天皇

天皇御製歌

春過而夏来良之白妙能衣乾有天之香具山

たちかへるなつきにけらしころもほすてふあまのかぐやま

過近江荒都時柿本朝臣人麻呂作歌

玉手次畝火之山乃橿原乃日知之御世從 或云自宮

阿礼座師之神之盡樔木乃弥継嗣尓天下所知食

之乎 或云食来 天尓満倭乎置而青丹吉平山乎超

或云虚見倭乎置 青丹吉平山越而

有石走淡海國乃楽浪乃大津宮尓天下所

知食 或云所食 天皇之神之御言能大宮者此間等

計来丁

難聞大殿者此間小雖云春草之茂生有霞立
春日之霧流 或云霞立春日香霧流夏草香盛成奴留 百磯城之大宮處兒
者悲毛 或云見者左夫思母

反歌

樂浪之思賀乃辛碕雖幸有大宮人之船麻知
小隅知之吾大王之所食天下乎國去思毛濃二
注有山川之清河内乎御心乎去野乃國之花
散相秋津乃野乃多藝乎宮柏太敷庄波百磯城乃大
宮人乃船並之且川渡舟競夕河渡此川乃絶事
乎久此山乃弥高思良珠水激瀧之宮子波見礼
跡不飽可毛

反歌

雖見飽奴吉野乃河之常滑乃絶事無久復還見牟

みれとあかぬよしのゝかはのとこなめのたゆることなくまたかへりみむ

安見知之吾大王神長柄神佐備世須登芳野川多藝津河内尓高殿乎高知座而上立國見乎為勢婆疊有青垣山之神乃奉御調等春部者花挿頭持秋立者黄葉頭刺理 一云黄葉加射之 逝副川之神母大御食尓仕奉等上瀬尓鵜川乎立下瀬尓小網刺渡山川母依弖奉流神乃御代鴨

反歌

山川毛因而奉流神長柄多藝津の内尓船出
ゐかも母

やすらはもよすてつるゝかなたつの
さうちにふれてせむしのも

右日本紀曰三年己丑正月天皇幸吉
丙寅朔戊辰少弾廣肆廣瀬王小
山田守官尤足中納言三輪朝臣高
市麿脱其冠位拏上於朝重諫
曰農作之前車駕未可動幸未
天皇不従諫遂幸伊勢正月乙丑
朔庚午御于胡行宮

（註）
文武天皇元年
天武天皇第四皇子母天智天皇第四女　河内皇子　元明天皇

軽皇子宿于安騎野時柿本朝臣人麿作歌

八隅知之吾大王高照日之皇子神長柄神
佐備世須太敷為京辛貴而隠口乃泊瀬山
右真木立荒山道乎石根禁樹禁押靡枝
雪乃朝戸開而玉限夕月夜来右三雪落河
駿乃大曽路乎隠須為寸田舎道乎押靡草枕多
日夜取世須古昔念而

短歌

阿騎乃野宿旅人打靡寐毛宿良自い方去部
念尓

真草苅荒野乎雖有葉過去君乎形見苅香

来所

よくさうあらはれあれとおもふ

きみのいたみのあとよわかう

東野実之可見与見為去月西渡日隆斯

皇子命乃雪剤可御猶之所斯時志来向

藤原宮大和国高市郡

藤原宮之役民作歌

八隅知之吾大王高照日乃皇子荒妙乃藤原我

宇倍示餝国平賣之賜牟登都家去高所知

武士祢長柄所念奈戸二天地毛縁而有許曽

盤石之淡海乃国之衣手能田上山之真木佐木

苔檜乃嬬手乎物乃布能八十氏河乎玉藻成

浮倍流礼其乎取登散和久御民毛家忘鴨毛

多尓不知鴨自物水尓浮居而吾作日之御
門尓不知國依巨勢道比我國者常世尓成
年尓負而神龜毛新釜泉乃河尓持越流真
木乃都麻手寸百不足五十日太作沂須良
寸伊蘇波久見者神随尓有ケ

右日本紀曰朱鳥七年癸巳秋八月
葦藤原宮地ハ年甲午春正月幸
藤原宮冬十二月庚戌朔乙卯遷居

藤原京 大和國高市郡

藤原京

從明日香宮遷藤原宮之後志貴皇子
御作歌

嬬女乃袖吹反明日香風京都乎遠見之用尓布久

きをやめて　ふるあすのせみ
やうをとはゝいろふく

藤原宮御井歌

隈知し和期大王高照日之皇子麁妙乃藤井
我原乎大御門始賜而槻安乃堤上乎在立之見
之賜吉日乎乃青香具山者日経乃大御門乎
春山跡之美佐佐倚立有畝火乃此美豆山者日
縫能大御門乎孫豆山跡山佐佐倚庭乎高
之青菅山者背友乃大御門乎宜名倍神
佐備立有名細吉野乃山者弟友乃大御門従
雲居乎曽遠久有家留高知也天之御蔭天
知也日之御影乃水許曽婆常乎有来御井
之清水

短歌

藤原之大宮都加倍安礼衡我妻女之友者之

呂賀閑

右歌作者未詳

大寶元年辛丑秋九月太上天皇幸于

紀伊國時歌

巨勢山乃列し椿都良倉見ゝ思奈許滿

乃春野乎

つばきまの つゐしたてるこにみておも

れ、ゐれをるれをを

右一首坂門人足

特統女帝

太上天皇当于従

北條

朝毛告木人之母ニ杵山行来比見良武樹人
友師母

アサモツノキヒトシシ　アツテ

右一首調首淡海

或本歌

河上乃列々椿都良余能班見安可受巨勢能
春野者

カハカミノ　ツラ〳〵ツバキ　ツラノヒニミレトモアカヌコセノハルノ

右一首春日蔵首老

義老大寶二年壬寅十二月十日甲辰太上天皇崩　特統
二年壬寅太上天皇幸于参河国時歌
寿大内淺天武天皇内淺
刀馬野尓仁保布榛原入乱衣尓保波勢多
鼻能知師尓
十月幸三河國十月三日癸十二月十四朔

右一首長忌寸奥麿

何人所念可船泊為武良安礼埼榜多味行
之棚無小舟

右一首高市連黒人

舉謝女王作歌

流紅妻風之寒夜尓吾勢能君者獨香宿良武

右一首長皇子御歌

長皇子天武天皇子母大江皇女薨時文武天皇三年七月薨

暮相而朝面無羨隠尓加氣長之廬利乃里什武

舍人娘子怪駕作歌

大夫之湯物矢手挿立向射流圓方波見尓清潔之

三野連名倭入唐時春日蔵首老作歌

在根良對馬乃渡し中尓幣取向而早還許年

右天寶元年正月

山上臣憶良在大唐時憶本郷作歌

業母之人高橋連虫麻呂歌集中出

吉来子尓早日本邊大伴乃御津乃濱松待恋

奴良武

いさゝとともゝひの[illegible]松ほともれみつれ

[illegible]

慶雲三年丙午幸于難波宮時

天智天皇第三子　忘記皇子母宮人氏道君伊羅都売　従二位

絶妻皇子　天智天皇第三子　母伊賀采女宅子　従二位

葬場所　従二位　宝亀元年追贈　御春日宮天皇

明念

君待つ　ゆくらもけたる　ふるさと

むきゆふつのことを　[illegible]

長皇子御歌

天武天皇第四子　母大江皇女　宝亀元年追贈

霧打安良礼　杉原伯吉乃弟日娘與見礼常

不能香閑

太上天皇幸于難波宮時歌

大伴乃高師結濱乃松之根乎枕宿杵家之所偲也

たほともれたうのたまもつのはをよく
らしわれといつもたをゆ

右一首道始東人

椋尓之而物忘之鳴毛石竹同有世去弥悲西死
萬思

右一首高安大嶋

大伴乃羨津能濱尓有忘貝家尓有妹乎忘西
念哉

たなともものみつれたまにあふわれをいい
まあるいもをまもしてたもつや

右一首身人部王

草枕客乃君乃知麻世波崖之埴布尓仁賀播

麻思呼

[illegible]

東方之　太上天皇　待仙天皇之大伊三[illegible]

右一首清江娘子進長皇子姓氏未詳

太上天皇幸于吉野宮時高市連黒人作歌

倭人者鳴而欲来良武呼児島嶺乃中山呼曽越奈流

やまとにはなほとつくもよふしもわさけ

なりけりよしのゝ宮にしかしる

大行天皇幸于難波宮時歌

文武天皇御宇慶雲元年　大行天皇　号号曰太上天皇

倭恋寐之不所宿尓情二此渚埼未尓多津鳴

倍思哉

やまとこひいのねられぬるこゝのそ

ゝにはなはなてつ

右一首忍坂部乙麻呂

玉藻苅奥敝波不榜敷妙乃枕之邊人忘可祢津藻

右一首式部卿藤原宇合

長皇子御歌

吾妹子乎早見濱風倭有吾松椿不吹有勿勤

大行天皇幸于吉野宮時歌

見吉野乃山下風之寒久為乎當也今夜毛我為

宿牟

よしのゝやまおろしのさむくをしてやこよひもわれをねむ

ふもわれひとわ物も

右一首或云　天皇御製歌

宇治間山朝風寒く様々師手衣應借妹毛有

勿久尓

うちなびく春さりくれば

うぐひすの鳴くなる

東書　長屋王左奏七天武天皇し孫高市親王子也　元正天平二代大臣也

養老五年正月任大臣　天平元年二月自殺　年四十六

和銅元年代中

天皇御製

丈夫乃弓高乃音乃聞乃

和銅元年代中

天皇御製

丈夫乃弓高乃音乃聞乃

大丈夫の弓高の音の聞の

ますらをの弓ばりの音の聞の

うちなびく春さりくれば

東書　御名部皇女　天智天皇女

御名部皇女奉和御歌

吾大君物莫御念須賣神乃御心賜流吾莫勿久尓

本日中三八

わのうつとしたなかはるのみのは

きうたしたまつるれなるしるる

和銅三年庚戌春二月従藤原宮遷于寧

樂宮時御輿傳長屋原迴望古郷作歌 一書云

太上天皇

御製

香具山

「香具山乎登立伊許婆見之国原

不所見香国安良武 一云香具山乎登立国見乎

香色安良武

301
10

昭和十二年七月五日印刷
昭和十二年七月十日發行　定價金貳圓參拾錢

東京市下谷區中根岸町七二　武田電話番号西
編輯者　かな名全讀集刊行會
代表者　武田基一
東京市下谷區中根岸町七二
發行人　武田基一
東京市荒川區千住町六丁目一六〇
印刷人　黑川秀藏

元禄萬葉集
校本
第一七

發行所　武田墨彩堂
東京市下谷區中根岸町七二
電話根岸三五七番
振替東京六〇五四八番

終